

パネルディスカッション

# これまでの10年間とこれからの未来

—フォト&スケッチ展 応募作品を用いた動画から見るUR団地—

URが毎年開催している「フォト&スケッチ展」。これまでに集まった応募作品を読み解きながら「団地の暮らし・コミュニティ」について話し合いました。

パネリスト



池邊 このみ氏

Konomi Ikebe

コーディネーター

千葉大学大学院教授  
ランドスケーププランナー

1957年生まれ。千葉大学園芸学部造園学科卒業、同大学大学院修士課程修了、同大学大学院博士課程自然科学研究科満期修了。学術博士。株式会社住信基礎研究所、株式会社ニッセイ基礎研究所にて上席主任研究員を務め、2007年～2010年はUR都市機構構想・コスト管理室都市デザインチームリーダーを兼務。2011年より千葉大学大学院園芸学研究所教授。



大西 みつぐ氏

Mitsugu Onishi

パネリスト

写真家  
大阪芸術大学客員教授

1952年東京生まれ。1974年東京総合写真専門学校卒業。1970年代から生まれ育った東京の下町、湾岸地域などを中心にそこに暮らす人々の生活をカメラに収め続けている。1985年に「河口の町」で第22回太田賞、1993年、「遠い夏」ほかにより第18回木村伊兵衛写真賞を受賞。写真展、著書多数。指導者としての活動や、執筆、コンテスト審査員なども務めている。



杉本 容子氏

Yoko Sugimoto

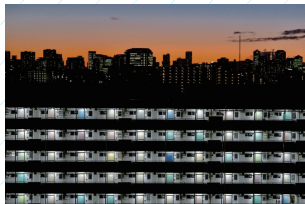
パネリスト

株式会社ワイキューブ・ラボ  
代表取締役/都市魅力プランナー

1975年生まれ。神奈川県藤沢市に育ち、大学進学を機に大阪へ。大阪大学大学院工学研究科環境工学専攻博士後期課程単位取得退学、工学博士。民間特別任用により大阪府都市魅力創造局の立ち上げに3年間従事した経験を持つ。2011年、コンサルティング会社ワイキューブ・ラボとして独立。水辺の魅力づくりを得意とし、「水都大阪」の都市開発プロジェクトに長年携わっている。



## フォト&スケッチ展とは？



2017年団地景観フォト大賞

- 全国のUR団地の写真とスケッチを募集し、審査と表彰を行う。
- 平成20年度に「全国団地景観サミット」としてスタート。
- 平成30年度で10年目を迎え、応募総数6,300点に。
- UR賃貸住宅のPRとともに「一般の方が団地のどこに着目しているのか」を知るためのアンケート的な意味をもつ。
- 平成30年度の応募作品は過去最多の957作品。応募者は、UR団地にお住まいの方とそれ以外の方が半々の割合。

## IKEBE'S SELECTION

**池邊**：私はニッセイ基礎研究所というシンクタンクに在籍していた際、3年間、URと兼務をいたしました。そのときに全国の148団地を視察して、団地のブランディングを中心に事業展開をして、実際に団地再生も手がけさせていただき、また、「全国団地景観サミット」のひとつとして、2008年にフォトコンテストも企画いたしました。これは、単なる写真コンテストではなく、団地に対するたくさんの思いが、言葉として入っているのが一番の特徴なんです。それでは、私がセレクトしたフォト&スケッチ展の作品を簡単にご紹介します。

**「初夏の昼さがり」**は、お母さんと娘さんがまさにスーパの冷めない距離に住んでいて、手を振っているというスケッチです。私がいた頃に、ニッセイ基礎研究所とURで商標登録させていただいた「アクティニア」という言葉があります。アクティブシニアのことなんですけども、まさにアクティニアによるコミュニティが描かれた絵ですね。



「初夏の昼さがり」 埼玉・吉川団地 小沢節子

**「聖夜に…。」**は、男の子が小さなプレゼントを持って女の子の住まいを訪ねるという、すごくロマンスの生まれる風景ですね。

麓(いらか)の波という言葉



「聖夜に…。」  
宮城・仙台鶴ヶ谷五丁目団地 莉部優子

葉がありますけど、こちらは団地の背中のようなものが夕日を浴びて、夢のようになっております。東京の百草団地の風景です。〔秋近し〕

背の届かない子どもが傘でチャイムを押している。京都の高の原駅東団地の写真です。〔ピンポン〕

雪が降った日に団地を上から眺めると、とても美しいですけども、この写真では地面に「スキ」と書いてある。バレンタインの



「秋近し」  
東京・百草団地 五十子基

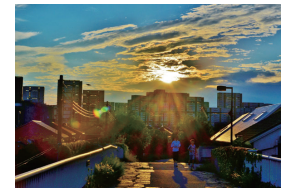


「ピンポン」  
京都・高の原駅東団地 ハンラティ



「バレンタイン雪景色」  
奈良・平城右京団地 大原孝子

雪景色です。  
〔バレンタイン雪景色〕



「朝日を背にランニング」  
兵庫・芦屋浜団地 高橋一吉

ちょっと見えにくいかもしれませんが、見た目にも印象的な芦屋浜団地を背景に、ランニングしている人が見えているという写真です。〔朝日を背にランニング〕

「雨あがりの非日常」は、透明感のある美しい写真で、中庭の水辺に緑が写りこんでいます。



「雨あがりの非日常」  
奈良・郡山駅前団地 本多敬

それでは大西先生にバトンタッチをしたいと思います。

## ONISHI'S SELECTION

大西：写真家の大西みつぐと申します。私は、東京の下町に生まれ育ちまして、隅田川、荒川、江戸川に挟まれた地域で、下町の暮らしを40年近くにわたって写真に撮り続けてきました。暮らしとひとと言っても、日常的なものと非日常的な、たとえばお祭りのような場面があります。その繰り返しによって、我々の生活は形成されています。やはり私にとっては人の匂いのする下町が原点ですから、下町の日常と非日常から何かしらのヒントや、まちづくりのあるべき姿が生まれているんじゃないかという思いに駆られています。

フォト&スケッチ展については、これまでに審査を5~6回ほどさせていただきました。今回のセレクション作品から、気に入った写真をご披露いたします。ご存知のように、現在、デジタルカメラが大変に普及し



「ふるさと」 奈良・平城第二団地 佐藤勝紀

ていますけど、コンテストの始まった2008年頃は、まだまだフィルムで撮ってらっしゃる方も多かったと思います。それから、一気にデジタルカメラが広まりましたけど、デジタルカメラは夜に感度を上げて撮影することに強みを発揮しますので、さまざまな方がこそって夜の団地写真を応募してくれました。「ふるさと」はその代表的な1枚です。



「雪の日」 北海道・五輪団地 山内佳子



「夢いっぱい」 大阪・泉南一丘団地 林涼子

こちらでもデジタルカメラらしい非常にビビッドな作品。雪の日がロマンチックに描写されています。〔「雪の日」〕

人間が中心になったイメージが私は好きなんです。暮らしのなかで人間がどういう風に描かれるんだろうと。



「ここで過ごした3年」 大阪・茨木三島丘イースト 瀬川全澄

やはり、写真を撮る／撮られるという関係をご家族や近隣のみなさんと共有しながら写真を撮っていただくと、こういういい感じになるんだと思います。記念写真こそ写真の原点ですね。〔「ここで過ごした3年間」〕

ベランダから、非常に美しい光を意識しながら写されています。光を意識してシャッターを切る、これは写真の基本ですけども、団地のコミュニティのなかで光を感じ、写真を撮る喜びをみなさんが紡いでくれたというのが、このフォト&スケッチ展の本当の収穫だと思います。〔「夢いっぱい」〕

「カーテン」は、ベランダを独自のとらえ方で表現されたもので、ユニークな世界。写真とはまた違った、スケッチならではのタッチがあります。そして、非常に温かい眼差しがありますね。写真もスケッチも、眼差しの賜物であるんだとあらためて思います。

切り絵のようなイメージですね。ここまでくると本当にプロフェッショナルのようでもあります。〔「全員集合」〕

池邊：ありがとうございました。では、杉本さん、お願いします。



「カーテン」 東京・町田山崎団地 山室嘉子



「全員集合」 福岡・若久団地 村上綾

## SUGIMOTO'S SELECTION

杉本：私は、都市計画やまちづくりのコンサルタントをしています。今回は、フォト&スケッチ展にいちばん関係のありそうな私の活動をご紹介します。2001年、建築や都市の専門家が集まって大阪のまちづくりの研究会をしたとき、ヨーロッパの街角には素敵な絵ががきが売られているけれど、大阪ではどうなんだろうということが議論になり、新大阪駅に調べに行きました。ところが、駅構内の絵はがきラックは半分が京都の絵はがき、その半分が神戸の絵はがきでした。これではダメだということで立ち上げたのが「大阪えはがき研究会」です。当時、私はまだ大学院の学生でしたが、まちの暮らしやコミュニティの魅力を丁寧に伝えていくような作品を仲間と一緒につくり続けてきました。2010年からは、阪急電鉄さんのコラボで「阪急えはがきコンテスト」がスタートして、その審査にも携わらせていただいています。それでは、私が、これだと思ったフォト&スケッチ展のセレクション作品をご紹介します。

私がダントツに気に入ってしまった作品です。団地の共用部を自分の空間にしてしまうという、こういう空間のある住まいはすごく魅力



「移動図書館」 神奈川・コンフォール南日吉 野村悦子



「楽しいひととき」 千葉・千草台団地 渡辺志げ子

的だと思って、選ばせていただきました。〔「掲示板にスイカ?」〕

団地には図書館という機能がないのなら、持ってきたらいいじゃないというその発想がすごくいいと感じました。〔「移動図書館」〕

これは、近所の保育園の子たちが団地の公園を使わせてくださいということで来ているらしいんですけども、団地にお住まいの人だけでなく、周りに住んでいる子どもたちにとっても団地がいい場所になるというのは、本当にすばらしいことだと思って選ばせていただきました。〔「楽しいひととき」〕



「掲示板にスイカ?」 福岡・アーペインルネス足立 肥後富男

池邊：ありがとうございます。現在、この「フォト&スケッチコンテスト」の2008年から2016年の応募作品5,416点を使って、日本工業大学の学生たちと団地で起こるアクティビティの研究を進めています。学生は5グループに分かれて、未来の暮らしをテーマに5つの動画作品としてまとめてもらっているのですが、とってAIとかそういうものではなく、若い方々が団地のなかで生活を育んでいくという視点を持った内容になっています。

杉本：動画を拝見すると、若い学生さんが地に足の着いた未来を描きだしていることにホッとしました。都市の専門家と未来の都市像を議論すると、これからはICTだとかスマートシティだとか、そういった話になりやすいですから。リアルな人の暮らしに近いところで制作された動画がとてもいいと感じました。

大西：一般の方にとって写真は身近で、日常生活のなかでシャッターを押す機会に恵まれているという時代です。それがわれわれの記憶、記録となくっていくわけですけど、それぞれの記憶をどうやって記録として集積していくのか。そうしたことが未来につながる取り組みなのだと思います。学生さんがつくった動画を見ていると、我々も参加してみようかなという気持ちになってくる。60代、70代の世代だって、率先してコミュニティに関わっていく風になればと思います。

池邊：URの住まい手の方々が団地を誇りに思い、これからも多くの人が住みたいと思えるような団地にしていけることが、未来に必要なものだと思います。URさんにはハードの部分はプロが集まっていますから、今後はソフトの部分で若い人たちが多くの世代が参加できるような仕掛けをしていただければと思っています。



※2018年10月、大阪・阪急うめだホールでの「平成30年度URひと・まち・くらしシンポジウム」内で行われたパネルディスカッション「これまでの10年間とこれからの未来（団地の暮らし・コミュニティ）」の内容を再構成したものです。